洋書紹介

創造性について

——最近の Childhood Education より——

○　知能は固定したものではなく、変動するものである。知能指数はかならずしも、人のもっている知能のすべてを代表するものではないがこれも変動することが知られている。精神を動揺させるような経験をするときには、知能指数も下がるのである。まして、知能の質的な面は、人生の豊かな経験をするときに、豊かに向上するのである。知能指数の如何にかかわらず、すべての子どもは豊かな知能をもっている。そしてそれぞれの子どもに応じて、いろいろの発展の可能性をもっている。重要なことは、両親や教師が、その可能性を信じて子どもに接することである。子どもがもっている能力を使うようにするのみでなく、その能力をさらに発展させるようにすることである。知能は使用することによって増加し、そのときに子どもは喜びを見出す。そして知能を用いる人に満足を与え、その人とともに働くおとなにも喜びを感じさせる。満足して自分の力を伸ばしている者とともに、その傍にあることは、実にたのしいものである。それは、幼児とともに生活するおとなのもつ特権である。

○　従来の伝統的な考えによれば、すでに知られていることをいかに教えるかということが教育であると考えられている。しかし、われわれの文化を形成してきたものは、常に、未だ知られていないものと、とりくむ精神であった。しかし、われわれの教科書も、教師も、このことに力を注ごうとしないのである。創造性のテストをいろいろと考案して実施してみると、もっとも創造的とされる人の六七パーセントは、知能指数としては高くないのである。すなわち、知能指数で高い得点の人をとったとすると、創造性の高い人の大部分は、落ちてしまうことになる。

○　討論をしていて、そこで議論の的になっていることから立ち返って、ものごとを正しい角度から見る能力は、創造的能力の重要な一側面である。ある線に沿って考えているときに、もしもだれかが、根本的なところに立ち返って、正しい角度から考えて発言したとすると、その人は、その場面を少なからず動揺させるであろう。うるさがられるかもしれないし、迷惑に感じられるかもしれない。しかし、その人は、正しい角度から物を見ていることによって、その場に貢献しているのである。

　自分で考えて行動する子どもは、しばしば教師のいうことをきかない子どもである。その場に容易に順応して、権威に従順な子どもは、しばしば創造性を欠く子どもである。ある研究によれば、子どもは高校に入る以前に、質問をしたり好奇心をもったりする能力を失ってしまうということである。われわれは子どもの創造性を伸ばすために、学校のプログラムを検討し直す必要にせまられている。

○　本来、人は創造的に学ぶことを好むものである。すなわち探索し、いじりまわし、質問し、ためし、冒険を試み、考えをたしかめそれによって考え方をかえることを好む。しかるに、われわれは、何か権威によって学ぶことの方がより効果的であると考えている。

　もしも何か間違っているとわれわれが感じるとき、そこに緊張が生じる。われわれは不

快であり、その緊張を解消するために何かしたいと思う。そこに質問、推測、探究が起こる。そして何かを発見するときに、われわれはそれを人に告げたいと思う。これは創造的な学習であってごく自然な学習の形である。

創造性を身につけさせるためには、創造的な活動が生じたときに、それに報いてやることが必要である。そこで教師は、突拍子もないようにみえる質問を尊重する必要がある。また、教師が考えてもいなかった子どもの考えを尊重する必要がある。創造的な子どもは、教師が気がつかないことに気がつくものである。教師は子どもの考えが価値があることを示してやる必要がある。また自発的な学習をすすめる機会を多く与える必要がある。あまりにこまかいところまで立ち入って監督し、予定したカリキュラムに固執してはならないのである。また、何よりも、子どものしたことをすぐにおとなの観点から評価するようなことをしてはならない。それは子どもが自ら学び発見することを妨げることになろう。

○　われわれは、子どもが間違えることの自由を与えてやらなければならない。間違えるということは、子どもが自分の努力を自分で評価する過程である。間違えることによって、子どもは正しいやり方を自分で見出し、学習していく。

ところが多くの学校において、間違えることは、恥をかくことであり、悪い成績をとることであり、悪い生徒である。このような雰囲気の中では、子どもは質問をすることを避け、自分では分かっていないことを暗記し、理解していないことをかくそうとする。

宇宙科学者は、ロケットの打ち上げに成功するまでにどれだけ多くの間違った試みをしたことであろう。一回だけで成功するというようなことはこの人生にはないのである。それなのに、学校での学習が人生から切り離されてよいであろうか。学校で、間違いをしながら、自ら発見することを学び、その苦痛と喜びを経験することこそ、真の学習をすすめる道である。

○　現代の子どもは、表面的に知識や教材の上を通りすぎることになれている。彼らは「正しい」答えを求めるが、自分の心の奥まで納得しようとしない。だから、探し、求め、発見するときの興奮を知らない。子どもたちは、学校で静かに時間を消費する「道徳」を学んでいるが、創造の喜びを忘れてしまっているのである。

（T）

幼児の教育　第六十六巻　第五号

五月号　©　定価八〇円

昭和四十二年四月二十五日印刷
昭和四十二年五月　一　日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします